

1  
章

「漢字」で幼児の脳がみるみる伸びる

幼児期こそ最適齢期、学習効果は六倍以上

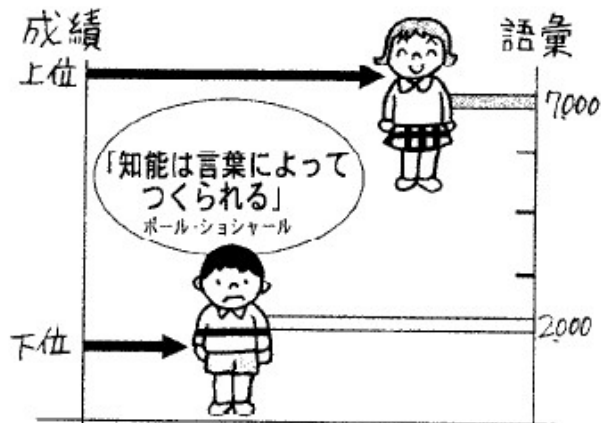
目で「見る言葉」漢字が子どもの知能を育てる！

●知能は言葉によってつくられる

まずは、こんな興味深いデータからご紹介しましょう。

小学生を対象に、知っている言葉の数（こい語彙）と成績の関係を調べたところ、一年生の段階で、成績上位の子どもの語彙が約七〇〇〇語だったのに対し、成績下位の子どもは約二〇〇〇語と、何と三倍以上の差があることがわかったのです。そして、六年生でも、全体に語彙は増えているものの、成績上位者と下位者とは、やはり語彙に三倍以上の格差があったといえます。

つまり、この結果は「知っている言葉が多い子どもほど成績もよい」という傾向をはっきりと表しているわけです。



成績上位の子供ほど語彙が豊富

しかし、よくよく考えてみますと、これは少しも意外なことではありません。私たち人間は、言葉があつてこそ、はじめて考えることができます。そして、理解したり表現しようとしたりする内容が、高度に、また複雑になればなるほど、その内容に見合った豊かな語彙が必要になってきます。

逆に言えば、知っている言葉が多ければ多いほど、一つの事柄をより深く理解したり、より豊かに表現したりするこ

とが可能になるのです。

早い話、算数や社会、理科といった国語以外の科目でも、まず先生の話や教科書に書かれていることをしっかり理解する能力がなければ、いくら机に向かっていても、学習効果は上がりませんし、子どもの苦手な算数の文章問題は、数式を知っていても問題の内容を読み取る力がなければ解けないのです。

そうした意味で、言葉の力というのは、あらゆる教科の基礎であり、子どもの考える力、すなわち知能そのものに直結していると言ってもよいでしょう。

また、ふだん、あまり意識することはありませんが、そうした知能の土台となる人間の記憶自体も、見聞きしたことがそのまま残るのではなく、一度頭の中で言葉に置き換えることで、はじめて知識として蓄積されていくものです。

実際に、何人かの子どもに、黄色い縞模様しまのある蝶の標本を見せ、よく観察させた

後、数時間してからたくさんの蝶の標本を前にして「さっき見た蝶はどれ？」と尋ねてみます。すると「黄色」や「縞」という言葉をすでに知っている子どもは、すぐに正しく指すことができるのに、それらの言葉を知らない子どもは首を傾げてしまうといえます。

つまり、「この蝶は黄色い」とか「縞があるな」と認識できるのは、それらの特徴を頭の中で言葉に置き換えることができるからであって、同じものを目にしているも、表現する言葉をもたないと、色も模様もはっきりと意識することができないのです。

「知能は幼児期に言葉によってつくられる」——これはフランスの言語・心理学者ポール・ショシャルの言葉ですが、先に挙げた例からも、言葉の豊かさ、すなわち語彙というものが子ども、特に脳の発達期にある幼児の知的発育にどれだけ大きな意味をもっているかがわかりただけだと思います。

## ●石井式漢字教育で幼児が漢字をすらすら読む

なぜ、わざわざ冒頭でこうした言葉の重要性に触れたかと言いますと、実は私が五十年來提唱してきた石井式漢字教育とは、幼児期から楽しく漢字を学ぶことを通して、まさにこの「言葉の豊かさ」を身につけ、それによって、子どもたちの自ら学び考える力を伸ばすことを目的としたものだからです。

「幼児期から漢字を」などと言いますと、それだけで「最近では、ひらがなの読み書きだけでは他の子と差がつかないので、とうとう幼児に漢字まで教え込む時代になったのか」などと早合点する方がいますが、これはまったくの誤解です。

まず第一に、石井式では、ひらがなの読み書きの延長として漢字を教えるのではなく、幼児に最初から漢字で教えます。たとえば、目の前に鳩がいたら、はじめから「は」とではなく「鳩」として教えてあげるわけです。

第二に、石井式では、幼児に漢字を書かせません。読めれば、それでよしとするのです（「読み先習」）。

すると、どんなことが起こると思われませんか？

ご存じのように、幼児というのは、われわれ大人をはるかに凌ぐ記憶の天才です。特に、漢字のような特徴のある形をそのままイメージとして記憶するのは、もともと得意とするところですから、読みだけならいとも簡単に覚えてしまいます。

しかも、このとき、実際に鳩なら鳩、蟻ありなら蟻の実物や写真や絵などを示しながら漢字を教えるようにしますと、漢字の読みと一緒に指し示す内容（二意味）もしっかりと記憶に刻まれるため、次に漢字だけ目にしたときも、鳩や蟻の姿を生きいきと思いが浮かべることができるようになります。

ここまでの話で、察しのよい方なら、もうおわかりでしょう。そう、私のいう漢字教

育とは、ただ“漢字を”教えることを目的とした詰め込み式の教育ではなく、漢字を一つの手段とした“漢字で”教える言葉の学習なのです。

おそらくお母さん方の多くは、漢字教育などという言葉を聞くと、学校時代の書き取りのドリルや小テストなどを連想し、あまりよいイメージは浮かばないのではないのでしょうかと思います。

しかし、読み先習の学習法ならば、子どもたちは決して漢字を嫌がりません。それどころか、幼児期なら誰もがもっている素晴らしい記憶力を十分に発揮でき、また一度覚えた漢字に出会うと「あ、知ってる」「読める」という喜びがあるので、漢字への興味はどんどん深まり、語彙も自然と豊かになっていくのです。

現往、石井式漢字教育を実践する幼稚園や保育園は全国に約七〇〇園ほどありますが、その園児たちは、一年に三〇〇〇〜五〇〇〇字の漢字をらくらくと覚えてしま

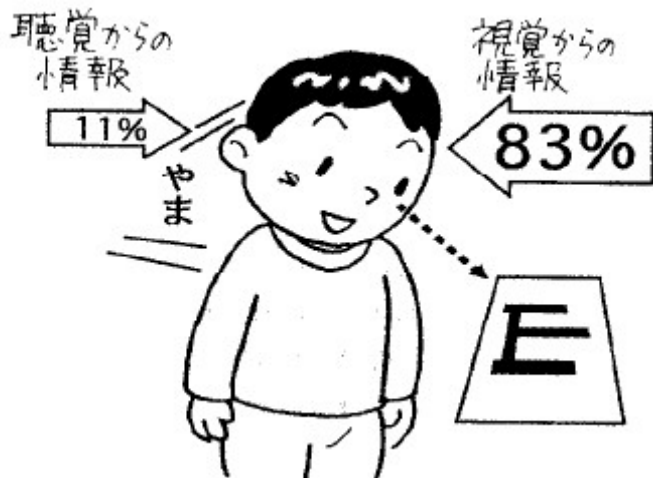
います。そうして、ゲームや遊びの中でくり返し漢字に触れることによって、いつの間にか、漢字かな交じりの絵本もひとりで読めるほどに言葉の力が身についているのです。

### ●漢字で学べば六倍以上の学習効果が！

ところで、幼児にたくさん言葉を身につけさせるためなら、何も漢字を使わなくても、お母さんが意識的に語り掛けや読み聞かせを多くしてあげたり、あるいは、ひらがなを使って言葉を教えてあげれば十分、と考える方も多いと思います。

ひらがなと漢字の違いについては、この後、詳しく説明しますが、その前にまず、耳だけで言葉を学ぶのと、これに漢字をプラスした場合では、どんな差が出るのかをお話しておきましょう。

人は皆、赤ん坊の頃から、絶えずお母さんの言葉を耳で聞き、最初は、その言葉を



視覚情報の吸収が圧倒的に多い

科学的にも、人間が五官(視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚)から吸収する知識のうち、視覚からの情報が約八三パーセントと圧倒的に多く、聴覚か

た字を指して「これは何という字だったかな?」と尋ねると子どもたちは、はじめて目にしたそれらの漢字を次から次へと間違えることなく読んでしまいます。視覚的な情報というのは、それほど記憶に残りやすいものなのです。

そっくり真似ることによって少しずつ言葉を習得していきます。それは、誰もが経験してきたことなので、つい何でもないことのように思ってしまうがちです。ところが、耳から入ってくる音声としての言葉というのは、次々に発せられては消えていってしまいますから、これをしっかりと記憶にとどめるのは、なかなかたいへんな作業なのです。

ところが漢字は、形のない音声としての「聞く言葉」とは違って、はっきりとした形をもつ、いかなれば目で「見る言葉」です。しかも、この「見る言葉」としての漢字は、いつまでも消えずに目の前に残っていてくれますから、それ自体が記憶の助けとなり、ただ耳で聞くよりもずっと効率的に言葉を覚える助けになってくれるのです。

私はよく幼稚園や保育園の園児たちの前で、キーワードとなるいくつかの言葉を黒板に漢字で書きながら、お話を聞かせます。そして、お話が終わった後で黒板に書い

らの情報は約一パーセントに過ぎないことが明らかになっています。

また、実際にアメリカで行われた実験で、知らない言葉を提示して翌日どれくらい覚えているかを調べたところ、翌日まで覚えていた人の割合は、目だけを使って覚えた場合が二〇パーセント、耳だけの場合が一〇パーセントだったのに対し、目と耳両方を使って覚えた場合は六五パーセントと、群を抜いた好成绩が出ています。

つまり、このデータからすると、音声としての“聞く言葉”だけでなく、“見る言葉”としての漢字と一緒に学べば、六倍以上もの学習効果が期待できるというわけです。

漢字はひらがなより覚えやすい！

●読みから学べば漢字は少しも難しくない

お気づきのように「ひらがなより先に漢字を」「漢字はまず読めればよい」といった私の方法論は、現在の日本の学校教育教官のやり方とは、まったく正反対のもんです。

では、そもそも幼児や小学校低学年の子どもに、まずひらがなから教える教育が一般的なのは、なぜだと思えますか？

おそらくほとんどの方は「それはひらがなのほうが漢字よりやさしいからに決まっているじゃない」とお答えになるでしょう。確かに、漢字の大半は、ひらがなより画数が多く、複雑な形をしていますから、そう考えるのも無理はありません。

頭がいい親の3歳からの子育て

しかし実は、画数の多さや字形の複雑さが覚える支障になるのは「書く」ことを前提

としているからであって、「読み」を覚えるだけなら漢字はひらがなよりずっとやさしいのです。

もし、まだお子さんが、ひらがなも漢字もまったく読めない状態でしたら、ぜひ試してみてください。まず、お子さんがよく知っている言葉（たとえば「鳩」「蟻」などを漢字で一枚ずつ紙に書いて、それをお子さんに見せながら「これは鳩よ」「こっちは蟻よ」と読んであげます。しばらくして、もう一度同じ紙を見せ「蟻はどこ？」と尋ねると、必ず正しく答えられるはずです。

ところが、ひらがなで「は」と「あり」と書いた場合には、こうはいきません。その場では覚えられても、すぐにどちらがどちらだったか、記憶があやふやになってしまうのです。

これは、複雑な形をした漢字のほうが、単純な形のひらがなより記憶の手がかりが多いためです。人の顔を覚えるときも、眼鏡やほくろなど、特徴が多い顔の人ほど印象に残りやすいものです。漢字のほうが覚えやすいのも、これとまったく同じ原理なのです。

### ● 幼児にとって「鳩」は「鳥」よりやさしい

もう一つ、別の例を挙げてみましょう。

「鳩」「鳥」「九」——この三つの漢字の中で、幼児がいちばん覚えやすいのは、どれだと思いますか？

これも実際に試していただければわかることですが、正解は「鳩」。そして、次に覚えやすいのが「鳥」で、いちばん覚えにくいのが「九」です。一見、簡単そうに見える「九」が難しく、いちばん難しそうなの「鳩」が幼児にとってやさしいのはなぜでしょうか？



先ほどお話しした「複雑な形のほうが記憶の手がかりも多い」というのも、理由の一つと言うことができます。しかしそれ以上に大きいのは、「鳩」が幼児にとって具体的な生きいさとした内容をもっているということです。鳩を知らない子どもはいません。ですから、一度「鳩」という字を覚えたら、頭の中でしっかりと自分の知っている鳩のイメージと結びつき忘れることがないのです。

ところが、「鳥」という名前の鳥はいませんから、幼児ははっきりと具体物を思い浮かべることができません。まして、「九」という数の概念は、ひじょうに抽象的であるため、幼児にとってはもっとも覚えにくいものなのです。

つまり、幼児にとって、漢字のやさしき、難しきとは、その内容(意味)がありありとイメージできるかどうかであり、字の外見上の難しきとは関係ないのです。別の言い方をすれば、いくら見た目が難しそう漢字でも、幼児がはっきりとその実体をイメ

ージでできる言葉であれば、簡単に覚えられるということです。

このことを最初に私に教えてくれたのは、以前私が小学校の教員をしていたときに担任したY君です。彼は、一年生を終えても、ひらがなが一字も読めるようにならない極端な“劣等生”でした。いちばん簡単に思える漢字の「一」や「二」も読めません。

ところが、そのY君が「雲」や「雪」の字なら、決して間違うことなく読んでしまうのです。あまりにも自信満々に読むものですから、ある日、私は「雪」という字を示して、「本当はこっちが『くも』という字じゃなかったかい？」などと、少々意地悪な質問をしてみたのですが、Y君の自信は少しも揺らぐことはありませんでした。

毎日のように眺めている雲や大好きな雪は、Y君にとっては、まさに生きいさとした実体であり、そのイメージがいったん漢字としっかり結び付いたら、もう間違えようがなかったのです。

## ●漢字が言葉への理解、興味を深める

このように、幼児にとっては漢字のほうが、ひらがなよりけるかに覚えやすく、また、幼児にもわかりやすい具体的な内容をもつ漢字であれば、画数の多さや形の複雑さに関係なく、どんどん覚えていきます。

そして、もう一つ有要なことは、最初から漢字で教えることによって、幼児の言葉そのものへの理解や興味・関心も深まっていくということです。

たとえば、ひらがなで「あめ」と書いてあったとします。これだけでは「雨」なのか「飴」なのか、まったく区別がつきません。こんなとき、私たち大人なら、そのときの状況や前後の文脈などから、どちらの意味か推測することもできますが、まだ言葉の力そのものが十分でない幼児にとって、これは大きな負担です。

それに、せつかく読めても、意味がはつきりわからないのでは、子どもはちっとも楽しくありません。

ところが、これを漢字で書いてあれば、見ただけで「あ、空から降ってくる雨だな」とか「さつき、おやつに食べた飴のことだ」というように、瞬時にはつきりと言葉の意味を思い浮かべることができるのです。

また、私たちの身のまわりには「幼稚園」はあっても、ひらがなで「ようちえん」という表記は存在しません。ですから、いくらひらがなで言葉を覚えても、読めるのは、幼児や小学低学年用の教材くらいで、せつかく学んだことが少しも生かされません。

ところが、幼稚園は「幼稚園」と、そして「学校」「病院」「郵便局」「交番」など、漢字で表記することが常識となっている言葉は、何でも最初から漢字で教えてあげれば、街を歩いていても、お父さん、お母さんが読んでいる新聞や本をのぞいても、いくらでも

自分の知っている言葉を発見することができます。

「お母さん、僕(私)、この字、読めるよ!」——この喜びこそが、漢字や言葉に対する興味と関心の原動力となり、また、本を読んでみたいという意欲や自ら学ぶ力にもつながっていくのです。

### ●漢字から学ぶば、ひらがなも自然に身につく

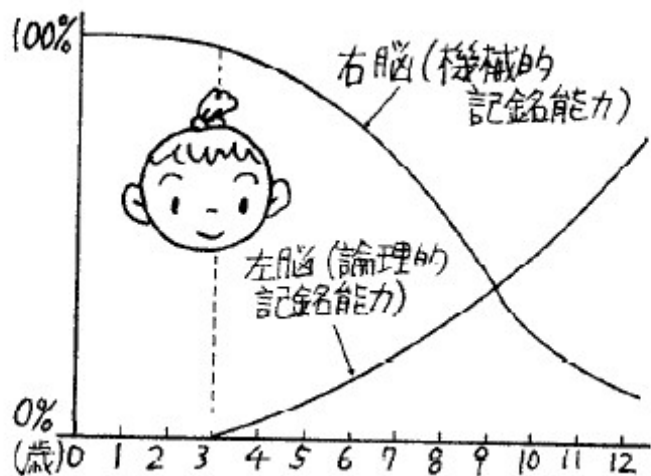
「でも、小学校へ上がってからのことを考えると、やっぱりひらがなが読めるようになっていないと心配」というお母さんも少なくないでしょう。

ところが、最初から漢字で表記できる言葉は漢字で学ぶ、という学習法を行っていくと、ひらがなは自然と読めるようになるものなのです。

というのも、日本語は本来、漢字とひらがなを組み合わせて表記されるものだからです。たとえば、名詞でも「お父さん」「お母さん」「赤ちゃん」「男の子」といった言葉は漢字かな交じりで表記しますし、「赤い」「長い」「大きい」などの形容詞、「泣く」「走る」「遊ぶ」などの動詞には送りがながあり、また、語尾は活用によってさまざまに変化します。

漢字学習を進める中で、こうした漢字かな交じり表記の言葉を「これは漢字で、これがひらがな」というような説明は一切せずに与えていきますと、幼児は最初、ひらかたまりの言葉として、これらを覚えます。そうしたことをくり返していくうちに、「お父さん」「お母さん」には「お」と「さん」という同じ字がついていること、そして、これらはいつも同じ音を表していることが経験的にわかってきます。

そして、こうした学習をさらに「海は広いな、大きいな」というような文章に発展させて、くり返し読んでみると、「あいいうえお」から一字ずつ教えるより、ずっと早く、ま



脳成長のイメージ図

識したり、音楽や絵画の素暗らしさを感じ取ったりする、いうなれば“イメージ脳”で、目にしたもの、耳にしたものをそのまま全体のイメージとしてとらえるのが得意です。ですから右脳優位の幼児は、理解できないものでも、まるでカメラのシャッターを切るように、そっくりそのままイメージとして頭の中に取り込んでしまう、大人にはない特殊な能力をもっているのです。

た正確にひらがなを読む力も身についてくるのです。

### 幼児期こそが漢字学習の最適年齢

#### ●人間の記憶力は三歳がピーク

ここでちょっと角度を変えて、幼児の脳の発達仕組みから漢字教育というものを考えてみることにしましょう。

ここでまず知っておいていただきたいのは、0〜6歳までの乳幼児期は、いわゆる「右脳優位」と呼ばれる時期で、「左脳優位」の私たち大人の脳とはまったく違った働きをしていることです。

ご存じの方も多いと思いますが、左脳は“言語脳”とも呼ばれ、言葉を使って理屈でものを考える脳です。これに対して、右脳は言葉を仲介せず、空間や位置関係を認

幼児が丸暗記の天才なもの、こうした理由からなのです。

このように、物事を理屈で理解するのに必要な言葉の力が十分でない幼児にとって、漢字は、外界から情報を吸収するための、きわめて有効な手段となっているのです。

ところが、大脳生理学の権威、時実利彦博士も「記憶力は三歳児が最高で、以後は年ごとに低下する」と述べているように、こうした幼児特有の丸暗記能力（これを「機械的記憶能力」という）は、〇〜三歳をピークに、その後は徐々に低下しはじめます。

そして、特に左脳の働きが活発となる九歳を過ぎたあたりからは、急激に衰えてしまうのです。

私の経験から言いますが、漢字を覚える能力は、大人より子ども、中学生より小学生、そして小学生よりも幼児のほうが明らかにすぐれています。

また、自分が興味・関心をもっていることであれば、同じことをくり返しても飽きる

ことがない、というのも右脳優位の幼児期の大きな特徴です。お子さんにせがまれ、お気に入りの絵本を一日に何度も何度も読まされた、という経験は、おそらく多くのお母さんがおもちではないでしょうか。

漢字学習にしても、幼児が興味をもちやすい身近な言葉を、遊びの延長として教えてあげますと、子どもたちは反復を少しも苦にしないばかりか、「もっと、もっと」と進んでやりたがるようになります。

こうした点からも、幼児期のほうが、小学校に上がってからよりもずっと早く、そしてずっと楽に漢字を身につけることができるのです。

### ●右脳でも受け止められる文字は漢字だけ

ところで、左脳が別名“言語脳”と呼ばれることからわかるように、通常、人の話

を聞いたり、話したり、読んだり、書いたり、といった言葉に関わることは、すべて左脳で処理されます。ですから、漢字であろうと、ひらがなであろうと、文字を読むときに働くのは左脳だけ、と考えられていました。

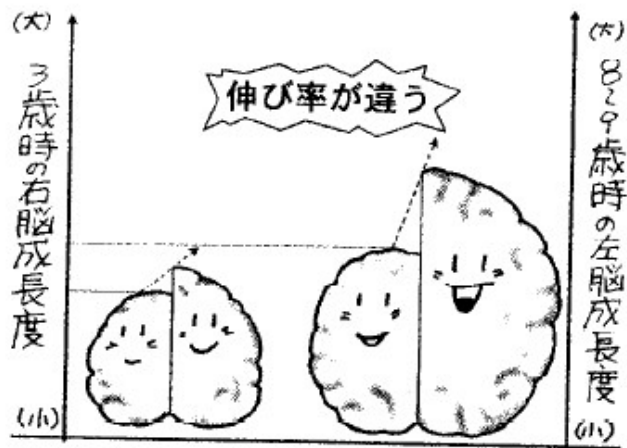
ところが最近の研究によれば、ひらがなを見たときには、左脳だけしか働かないのに対して、漢字の場合だけは、右脳と左脳の両方の脳を使って処理されていることがわかってきたのです。

これには、すでにお話ししましたように、漢字は複雑な字形をしているので、逆に図形的なイメージで捉えやすいことや、表音文字であるひらがなと異なり一字一字が明確な意味をもつ漢字は、見た瞬間に言葉の内容をイメージとして思い浮かべることができるといったことが深く関わっていると考えられます。

いずれにせよ、右脳優位の幼児にとって、左脳にしか入ってこないひらがなと、右脳でも受け止めることのできる漢字とは、どちらが覚えやすいか？ 答えは言うまでもありません。そして、これはまた、「漢字教育にいちばんふさわしい時期は幼児期である」ということの裏付けとも言うことができます。

### ●漢字学習で右脳を伸ばせば左脳もぐんと発達

幼児特有のすぐれた丸暗記能力、すなわち機械的記銘能力は、すでにお話ししたように九歳を過ぎた頃から少しずつ低下しはじめますが、それと入れ違いに、ちょうどこの頃から芽生えはじめるのが、左脳によって物事を論理的、分析的に理解し認識する力、すなわち「論理的記銘能力」です。わからないこともイメージとしてそのまま吸収してしまう幼児の脳の働きから、私たち大人と同じように理屈でものを考える脳へと徐々に移行しはじめるわけです。



右脳が伸びれば左脳はもっと伸びる

三歳を過ぎた頃から「なぜ?」「どうして?」という問いかけが急に多くなるのも、そのためなのです。

ところが、幼児期の機械的記憶能力(右脳の働き)には、ほとんど個人差がないのに対し、論理的記憶能力(左脳の働き)のほうは、同じ年齢の子どもでも、その発達に大きな差が出てきます。そして、その差に深く関わっているのが、実は幼児期の機械的記憶能力の活かし方なのです。

まだ幼児のうちには、この機械的記憶能力を十分に刺激しておきますと、左側の働きである論理的記憶能力も、早くから急激なカーブを描いて伸びていきます。そして、左脳の働きが目立って活発になる八、九歳前後になりますと、機械的記憶能力を十分に刺激しておいた子どもと、そうでなかった子どもの間には、その考える力、すなわち知能にもはっきりと差が出てくるというわけです。

特に、言葉というのは、直接的に考えたり理解する力を支えたりする道具です。ですから“見る言葉”である漢字で言葉を学ぶことは、幼児ならではの機械的記憶能力をもっとも効果的に刺激して伸ばす方法であり、また、賢い子どもを育てるのに最適な方法でもあるのです。

## ● 幼児期こそ言葉を覚える臨界期

「幼児に何を学ばせるべきか」ということを考えたとき、もう一つ忘れてはならないのが、言葉の“臨界期”の問題です。

何かを学習するときには必ず「学習に適した時期」が存在します。すなわち、ある時期までに学べば簡単に身につくが、その時期を逃すと途端に身につけるのが難しくなるのです。これを“臨界期”と呼ぶのですが、言葉に関して言えば、この“臨界期”は幼児期なのです。

どの国の子どもでも、生後八ヶ月頃になると、お母さんが話しかける言葉をしきりに真似ようとははじめ、三、四歳までには誰もが自然に母国語の基礎をマスターしてしまいます。

しかし、もしこの時期に十分に言葉を与えられなかったとしたら、どんなことが起こるのでしょうか。その極端な例が、おわかみ 狼少女の話です。

一九二〇年、インドのカルカタ近くの洞窟から、狼に育てられた二人の少女が発見されました。発見後、二人はそれぞれ、アマラ、カマラと名付けられ、シング牧師によって大切に育てられました。ところが、アマラは間もなく死亡し、その後九年間生きてきたカマラも、牧師の熱心な指導にもかかわらず、その生涯の間にわずか四五の言葉しか覚えることができなかったといえます。

臨界期内である幼児期なら、三年間で二〇〇〇語もの言葉をやすやすと覚えることが出来ます。ところが、その臨界期を過ぎてからはしめた学習では、九年間やって、たった四五語です。

また、貧しい言葉しかもたないカマラは、最期まで人間らしい習慣は何一つ身につかず、笑ったり泣いたりという感情すら表すことがなかったといえます。



このような例からも、幼児期に惜しみなく十分に言葉を与えてあげることが、お子さんの成長にどれほど重要な意味をもつかがおわかりいただけるでしょう。私の実践する漢字教育とは、そうした言葉の学習を「ふさわしい時期（＝幼児期）に、ふさわしい道具（＝漢字）を用いて、楽しく行う」ものなのです。

## 漢字は幼児の脳には最高の栄養素

### ●漢字は子どもの推理、分析能力を自然に引き出す

漢字教育の効果は、幼児の語彙を豊かにするだけにとどまりません。“見る言葉”としての漢字には、特別に意識をしなくても、覚えて、くり返し読んでいるうちに自然に幼児の知能の発達を促す、いうなれば“脳の栄養素”がぎゅーりと詰まっているので

す。

たとえば、「鳩」「鶴」「蟻」「蝶」という漢字を知っている子どもは、誰かに教わらなくとも“鳥”や“虫”という共通部分を発見し、「鳩」と「鶴」、「蟻」と「蝶」が同じ仲間であることがわかるようになります。そして、習ったことのない「鶯」うぐいすや「蟬」せみという字を見ても、“鶯”は鳥の仲間だなとか「蟬は虫の名前かな」というように、分析したり推理したりする能力がひとりですぐに芽生えてくるのです。

言うまでもありませんが、「は」と「つる」「あり」「ちょう」と、かな表記で教えていたら、このような能力はまず育ちません。

また、「目」という漢字を覚えたばかりの幼児に、「見る」という字を見せ、「じゃあ、これはなんて読むか、当ててごらん？」と言いますと、“目”に関するある言葉というところを手がかりに、かなりの確率で正解します。これも、漢字だからできる類推であっ

て、ひらがなはもちろん、英語でも目は $\text{目}$ 、見るは $\text{見}$ で、両者の綴りにはまったく関連性がないため、 $\text{目}$ という言葉を知っていても $\text{見}$ の意味を推測することはできないのです。

これは石井式漢字教育を実践する幼稚園で実際にあった話ですが、ある日、先生が黒板に「悪魔」という漢字を書いて、「誰かこの字が読めるかな？」と尋ねたところ、答えられる子どもはいませんでした。そこで、先生が「これはね……」と言いかけると、子どもたちは慌ててそれを制し、「待って、教えないで。自分たちで考えるから」と言って、相談をはじめたということです。

子どもたちは「悪」という字はすでに習って知っていました。また、はじめて見る「魔」という字の中に、すでに絵本に出てきていた「鬼」という字があることを誰かが発見します。そうしたことを手がかりに、どんどんイメージを膨らませていき、

「“悪魔”って、きつとすごく悪いヤツだね。鬼みたいに怖い、悪いヤツって何だろう。えーと、アク、アク、……先生、これ、ひよとして、アクマじゃない？」

と、ついには自分たちだけで正解を導き出してしまったのです。

このように漢字は、見ているうちに頭の中で自然に推理や分析が働きはじめ、子どもたちの自ら考える力を引き出す、不忠議な力を秘めているのです。

### ●「三角形」「四分音符」も漢字で書けばよくわかる

会話の中で耳慣れない言葉や紛らわしい言葉が出てくると、「それはどういう字を書くの？」と確かめて、それではじめて意味がわかるということが、私たち大人にもよくあります。この場合の「字」とは、もちろん漢字のことで、音だけしか表さないひらがなの綴りを聞いても、まったく用をなしません。

これは、子どもでも同じです。たとえば、算数でも、最初から「さんかくけい」ではなく「三角形」と数えれば、「ああ、角が三つある形のことを言うんだな」とはっきりイメージすることができず。

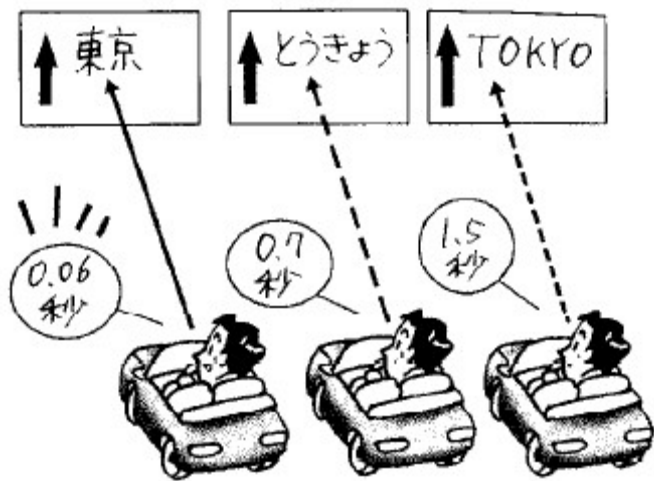
音楽で使う「四分音符」「二分音符」という言葉もそうです。これを「四ぶおんぷ」「二ぶおんぷ」といった中途半端な表記で数えてしまいますと、子どもは「算数だと四と四を足せば八なのに、音楽では何で四分音符と四分音符で二分音符になるんだろう」と混乱するばかりです。

それよりは、はしめから「四分音符」「二分音符」と表記し、一つのもの(全音符)を二つに分けたのが二分で、四つに分けたのが四分だから、四分音符を二つ合わせたものが二分音符になるんだと説明してあげれば、簡単に理解できて間違うこともないのです。

また「動物」という言葉は、幼児はもちろん、小学校高学年の子どもでさえ、犬や猫、猿、熊、ライオンなど、いわゆる“獣”のことだと理解している場合が多いものです。ところが、以前、私が小学一年生の担任をしていて、教科書に出てきた「どうぶつえん」という言葉を、「動物園」と漢字で書き直して見せたときのことです。子どもたちが「先生、『動物』って、動く物」って読めるね」と言うので、「そう、生き物には、本や花のように動けないものと、象や猿のように動けるものがあるんだ。それで、動ける生き物は“動く物”と書いて『動物』って言うんだよ」と教えてあげました。

すると、子どもたちから「じゃあ、金魚も動物なんだね」「蟻さんも動物なのか」「先生、それじゃ、人間も動物なの？」と次々と感嘆の声や質問が飛び出し、あつという間に「動物」という言葉の概念を理解してしまったのです。

自ら疑問を発し、ほんの少しヒントを与えられることで、自ら答えを導き出してい



漢字表記が圧倒的に読みやすい

七秒、「TOKYO」一・五秒に対し、「東京」は〇・〇六秒と漢字を読み取る速さは圧倒的で、同じ内容の言葉をひらがなの一〇倍以上のスピードで正確に理解することができます。文章でも、漢字かな交じり表記と、ひらがなだけで書かれたものでは、読むスピードが違ってきます。たとえば、「あすのあさはちじに、えきまえ

く——これこそが、本当の生きた学習と言えるのではないのでしょうか。これも、最初から「漢字で」教えるからこそできるものであり、こうして得た知識は決して忘れることがありません。

今挙げたのは、小学一年生の例ですが、幼児でも五歳児くらいになると、理屈で考える力がかなり育ってきていますから、漢字教育を続けていきますと、これくらいのことには十分に理解できるようになるのです。

●漢字学習で読書力にもぐんと差がつく

以前、日本道路公団では、道路標識の表記に使う文字を決めるために「とうきょう」「TOKYO」「東京」の三種類の標識を作り、どの表記法がいちばん読み取りやすいか、実験してみたそうです。すると、読み取るのにかかった時間は、「とうきょう」〇・

にしゅうごうしてください」

「明日の朝八時に、駅前集合してください」

この二つの文で、どちらが早く、かつ正確に内容を読み取れるかは一目瞭然です。

そして、漢字かな交じり文の中で、主要な意味を表すのは漢字ですから、当然のことながら“漢字力”は“読書力”にもつながってきます。

ただ、漢字をたくさん知ってさえいれば、読書のスピードが速くなるかというと、実はそれだけではないのです。私自身もそうですが、文字をひらがなから覚えた人間というのは、まず頭の中で文字を発音に置き換え、その音によって言葉を想起する癖がついているため、音読するのと同じくらいのスピードでしか、文字を目で追うことができません。

ところが、最初から漢字で学習した子どもは、漢字を一瞬で読み取る習慣が身についていますから、音声としての言語よりもずっと早く目読することができます。

私の子どもは、二人ともひらがなより先に漢字を覚えて育ったのですが、まだ小字校に入ったか入らないかという時期に、彼らが読んでいる本を後ろから目で追ってみたところ、すでに私の倍近いスピードで読んでいたのです。そして、後で内容を尋ねても、しっかりと答えられるのです。

三つ子の魂百までも」と言うように、はじめにひらがなから覚えた子どもは、大きくなってから努力しても、このような能力は身につけません。

こうした読書力の差というのは、たとえば学校の教科書の内容を理解する際などにも、はっきりと表われてきます。また、学校教育を離れても、本を読むという行為は、知識を深めたり人生を豊かにしたりするために欠かせないものです。

その意味で、幼児間に漢字学習で自然に身についた読書力は、お子さんの一生の財

産になるといってもいいでしょう。

## 幼児期からはじめる漢字学習のすすめ

### ●漢字は〇歳児でも覚ええられる

漢字学習にもっとも適した時期が幼児期であることは、すでにお話ししたとおりですが、では、いったい何歳くらいから漢字を覚えることが可能なのでしょうか。

「まさか」と思われるかもしれませんが、実は「ウンマ」「マンマ」といったカクコトを発しはじめると生後八カ月頃には、もう十分に漢字を識別できることがわかっているのです。

もちろん、まだ発語能力が十分ではないので、見た漢字を正確に読むことはできません。たとえば、「目」と書いたカードを見せて「め、め、め……」と読んであげ、次にお母さんが自分の目を指差して「め、め、め……」と言う、ということをくり返していると、まだ一歳に満たない赤ちゃんでも「目」という漢字カードを見て、自分の目を指さすようになりますし、「め」という言葉を聞いて、何枚かの漢字カードの中から正しいカードを指差すこともできるようになります。

こうした〇歳児からの漢字教育は、すでに石井式漢字教育を実践するいくつかの保育園で行われていますが、見学に来たお母さん方も、まだよちよち歩きの子どもたちが、たくさんの漢字カードの中から漢字で書かれた自分の名前を見つけ出す姿を目にすると、一様に驚かれるようです。

もう一つ興味深いのは、こうした〇歳児教室を受け持つ先生方が皆、「泣いたり、おぼろげだったりしているときでも、漢字カードを見せて読んであげると、大抵は機嫌を直

して、じつとカードを見ているのです」と話していることです。

一歳半で三〇〇〇字の漢字が読めるということで話題になった田中庸介君のお母さんのお話でも、生後八カ月頃、なかなか泣き止まない庸介君が何かを見た途端、びたりと泣き止んだので、その視線をたどると、神棚の下の「命名・田中庸介」と書かれた半紙だったそうです。そして、私の著書『漢字による才能開発』を頼りに、漢字カードを作って見せながら読んであげると、すぐに興味を示し、八カ月間で三〇〇〇もの漢字を覚えてしまったというのです。

なぜ、まだ言葉も話せない赤ん坊が、これほど漢字に興味を示すのか——その本当の理由を彼らの口から聞くことは残念ながらできません。ところが、たとえば赤ん坊が生まれながらにしてお母さんのオッパイを吸う術<sup>オベ</sup>を心得ているように、目で“見る言葉”としての漢字に関心を示すのも、言葉の動物である人間としての本能であるように、

に、私には思えてなりません。

### ●三歳からの三年間で漢字一〇〇〇〇字をマスター

このように漢字教育は、〇歳児のうちからでもはじめられるものですが、お子さんがすでに一歳を過ぎていても、決してあせる必要はありません。ただ、すでにお話したように、人間の一生でもっとも機械的記憶能力、つまり丸暗記能力が高いのは〇〜三歳頃ですから、できれば満三歳前後までにはじめるのがよいでしょう。

また、三歳頃から漢字学習をスタートしますと、毎日一字ずつ新しい漢字を覚えていったとしても、小学校へ上がるまでの三年間で、単純計算で一〇九五字の漢字が読めるようになります。

実際には、ほとんどの子どもが、これ以上の漢字を覚える潜在能力をもっています



3歳からの3年間で1095字覚えられる

れていることも楽に理解できます

から、当然学校の勉強も楽しくなります。

また、本を読むことが少しも苦にならないので、どんどん自分の興味を広げていくことができ、お子さんの考える力はひとりで伸びていくのです。

私の経験から言いますと、三歳から漢字をはじめると、知能指数は一年間でおおよそ一〇くらい高くなり、三年間やれば、ほとんどの子どもが知能指数一三〇、すなわちクラスで一人か二人くらいしかない「英才」のレベルに達しています。先ほどご紹介した田中庸介君も、高校時代、クラブ活動や好きな詩作に執申しながら東大医学部に進学し、現在も大学院に残って研究を続けていると聞いています。

●“漢字を書く”ことは急がなくてよい

幼児期からの漢字学習は、特別な道具や知識がなくても、ご家庭ですぐにはじめ

が、一日一字のペースでやっても、現在、小学校の六年間で習うことになっている、いわゆる教育漢字一〇〇六字も就学前には十分クリアしてしまえるのです。  
これくらいの漢学力を身につけますと、小学校に上がる頃には、小学生向けに書かれた本なら、そのほとんどを読みこなせるようになっていきます。そうすると、教科書に書か



ることができません。その具体的な方法については、3章に詳しく紹介しましたので、そちらをお読みいただくとして、ここでは「漢字を書く」ということに関して、少し触れておきたいと思います。

冒頭でも述べたように、石井式では漢字の読み書きを同時に教えることはしません。それは“書くこと”より“読むこと”を先に覚えるほうが、多くの点ですつと理にかなっているからです。

まず、幼児は、まだ手の運動能力が十分に発達していないため、直線や曲線を上手に使い分けて漢字を書くことは、物理的に困難です。

にもかかわらず、読み書きを同時に要求すると、書くことばかりに時間をとられて、幼児期にしかない、ずば抜けた丸暗記能力を十分に活用することができなくなってしまうのです。そして、幼児にとって苦手な“書くこと”を強要すれば、漢字そのものへの興味すら失いかねません。

また、読み書きを同時に覚えるということは、まだ文字の形が十分頭に入っていないうちから書かせることになるため、手本を見ながら書いても、どうしてもバランスの悪い字になってしまいます。

ところが、まず読みから学ぶと、何度もくり返し読んでいるうちに、文字の形も自然と頭に入ってきますから、それから書くことを学んだほうが覚えも早く、きれいな字が書けるようになるのです。

さらに、くり返し述べてきたように、漢字教育の目的は、漢字を覚えることではなく、漢字で学ぶことによって言葉を豊かにすることにあります。

そうした面からも、漢字は書くことよりも、まず読めて意味を理解することが大事なのです。

特に最近では、パソコンの普及により書くことの重要性が薄れ、学校教育でも徐々に“書く”ことより“読み”を重視するという方向に変わりはじめています。

こうしたことから、漢字を書くことに関しては小学校に入ってから学べば十分で、幼児に漢字を書くことを強制すべきではないのです。

ただ、漢字を何百字と覚えていきますと、幼児の中に自然に「漢字を書いてみたい」という気持ち芽生えてくることもあります。そんなときは、自分の名前など身近な漢字から少しずつ教えてあげてもよいでしょう。

## 広がる石井式漢字教育の輪

### ●全国約七〇〇の幼稚園、保育園が漢字教育を実践

こうした石井式による幼児からの漢字教育は、昭和四十二年、大阪の小路幼稚園をはじめとする数園で取り組みがはじまったのを皮切りに、現在では、北は北海道から南は沖縄まで全国およそ七〇〇の幼稚園、保育園で実践されるまでになっています。

これらの園では、すべての持ち物に最初から漢字で名前を表記したり、実物の時計や黒板の脇に「時計」「黒板」と漢字で書かれた紙を貼ったりするなど、入園当初から漢字が自然に子どもたちの目に触れるように配慮されています。

机や椅子が幼児用であることを除けば、小学校の中・高学年の教室と言ってもおか

しくない雰囲気なのです。はじめて見学に来た方は、まずそのことに驚かれるようですが、幼児には大人のように「漢字は難しいもの」という先入観はまるでありません。しかも、くり返し述べてきたように、ひらがなより漢字のほうがずっと覚えやすいので、自分の名前や身のまわりの物の名前の漢字は、何度か見ただけで、すぐに頭に入っています。一ヶ月もするとほとんどの友達の名前も、自然に漢字で読めるようになっていきます。

また、漢字カードや漢字の絵本、かるたといった教材も、遊びやゲームの中で無理なく反復できるようになっていますので、子どもたちは皆、楽しみながら一年間に三〇〇〜五〇〇字の漢字を覚え、年長になる頃には漢字かな交じりの絵本をひとりですらすら読むことさえできるようになるのです。

残念なことに、教育関係者の中にはいまだに「幼児のうちから漢字を学習する」と聞いただけで「詰め込みはいけない。幼児期には、まず情操教育やしつけを行うべきだ」と非難する人がいます。しかし、わずか八ヶ月の赤ん坊でも漢字に強い関心を示すことからわかるように、子どもは生まれながらにして漢字が大好きなのです。ですから、与える方法さえ間違わなければ、幼児たちにとって漢字は格好の遊び道具であり、その楽しみを知った子どもたちは旺盛な知的好奇心を發揮して、海綿が水を吸い取るように、ひとりでにどんどんと新しい漢字を吸収していくようになるのです。

そしてまた、私かこれまで実践してきたような方法で、楽しみながら漢字を身につけた幼児たちは、考える力が伸びるだけでなく、幼稚園や保育園で先生の話にきちんと集中することを覚え、感受性や表現力も、漢字を知らない子どもたち以上に豊かに育っていきます。そのことは、2章にまとめた石井式漢字教育を实践する現場



グレン・ドーマン博士とともに(人間能力開発世界会議にて・左から2人目が著者)

これを読んで私は驚きました。  
なぜなら「文字はワードで教えれば  
三歳児でも覚える。アルファベットか  
ら教えているので文字が難しくな  
るのだ」「Aからはじまるワードをい  
くつか教えてからAを教えるべきで  
ある」と、従来の文字学習の順序は  
逆であることを指摘しているではあ  
りませんか。この考え方は「文字は  
漢字から教えるべきである」「漢字  
をいくつも教えてから、かなは教え

の先生方やお母さん方の声からも、おわかりいただけることと思います。

●ドーマン博士も認めた漢字教育の素晴らしさ

アメリカのグレン・ドーマン博士といえば、幼児教育に関心のある方なら誰でも一度は耳にしたことのある名前だと思います。博士と、彼の主宰する「人間能力開発研究所」のスタッフは、脳障害児の治療とともに健常児の能力開発でも画期的な成果を上げて、世界的にも知られるようになっていきます。

昭和四十六年のことです。ドーマン博士の著書である『ドーマン博士の幼児開発法』が日本で刊行され、その一冊が私のところに寄贈されてきました。その前年、たまたま同じ出版社から『漢字による才能開発——三歳からの漢字教育』という私の本が刊行されていたためです。

るべきである」という私の考え方と同じです。

このことをリーダーズ・ダイジェスト社の知り合いに話すと「面白い。ドーマン博士を日本に招待しよう」という話になり、リーダーズ・ダイジェスト社と、当時、井深大氏が理事長を務めていた幼児開発協会との共催で、翌年、ドーマン博士を招待しました。

初めて会った博士は、私の実践課程や結果について、一々熱心にうなず頷いてくれて、賛意を表してくれました。このとき、博士は「アルファベットを教える前にワードから先に教えることが、人々にどうしてもわかってもらえない」と嘆き「これだけわかってくれる人が多い日本がうらやましい」と言いましたので、私は「二人がほとんど同時期に発見した教育原理だから、これを“石井・ドーマン方式”と名付け、協力してこの方式を世界に広めよう」と提案しました。すると、博士はすぐに「賛成。しかし“ドーマン・石井”という呼び方のほうがよいのではないか」と笑って答えました。

この初来日の際、私は各地の講演会にも同行し、講師紹介役を務めたことが縁となつて、博士は度々来日されるようになりました。

また、昭和四十八年五月、フィラデルフィアで第六回人間能力開発国際会議が開催された折には、ドーマン博士のお宅に五日ほど泊めていただきました。通りを隔てた向いに小学校があります。「私の研究所の子どもたちは皆、脳障害者であるが、三歳児でも本がすらすら読める。しかし、向いの学校の子どもたちは、六、七歳でもうちの三歳児ほど本を読めない子が多い。脳が健全だと文字が覚えにくいのだろうか」――博士が笑いながらそう言ったことが今も心に残っています。

「英語のワードよりも、日本の漢字のほうが覚えやすく、脳の発達にもよいと思うがどうか」と私が博士に問うと、すぐさま同意を示してくれました。そして、その数年後、博士の研究所を訪問したときには、明り障子の和室が作られていて、ロッカーの

中に可愛い子ども用の着物が何枚も衣紋掛けえもんに掛けられていました。

青い目のアメリカ人の幼児たちも、漢字を学習するときには、和服に着替えて学習するのだそうです。私はこのとき、アメリカ幼児教育視察団の団長として日本の幼稚園の先生たちを案内していたのですが、多くの先生方が、これを知りたいへん感激していたことを今でもはっきりと覚えています。

### ●石井式漢字教育が国語教育をも変えはじめた

さらに、石井式漢字教育の普及とその成果によって、わが国の国語教育も少しずつではありますが変わってきています。

まず中学を卒業するまでの間に習得すればよかった教育漢字八八一字が、小学校六年間で習得するように改訂されました。続いて、その次の改訂には小学校の学習漢

字が一〇五字増えて九九六字となり、平成四年度からは一〇〇六字にまで増えています。

学年別の配当漢字も、従来は一年生がもっとも少なく、学年が進むにつれて増えていたのが、次第に高学年の配当漢字が低学年に移され、現在では三年生で最高の二〇〇字に達し、五年生、六年生では次第に少なくなっています。

そして、何よりも大きいのは、これまで金科玉条のように守られていた漢字学年配当表が、じゅんしゅ遵守すべきものではなく、むしろ機会を作って早い学年で子どもたちに提出したほうが有効である、というように弾力的な扱いに変わったことです。

かつては「漢字の学年配当表を無視する石井方式は指導要領違反である」と非難していた文部省が、今は「学年配当表にとらわれた指導は望ましくないと、指導要領に明記するまでになったのです。まだまだ認識不足の面もあり手放して喜ぶわけにもい

きませんが、日本の国語教育にとっては大きな前進であると言っていいでしよう。

一方、平成二年、千葉県船橋市立法典東小学校の校長に就任された土屋秀宇先生（現・日本漢字教育振興協会理事長）は、「意欲的な読書ができる子どもを育てる」とを目的に、全校を挙げて石井式を共同研究し、四年間にわたって漢字教育を実践。平成六年には、この成果が認められて、教育界の栄誉ある読売教育賞の国語部門で唯一の優秀賞を受賞しています（法典東小における漢字教育実践の様子は、土屋先生のお話として、2章で詳しく紹介しています）。

また、これを機に、土屋校長は市内の教職員に呼び掛けて「漢字楽習の会」を作り、効果的な漢字教育法を研究するために、毎月研究会を開催するようになりました。まだまだ、新しい指導要領の精神を生かした漢字教育のできる先生方が少なく、旧態依然たる漢字教育が行われている中で、このような自主的な研究会が生まれたこ

とは、正しい国語教育の夜明けが近いことを思わせ、私としても心強い限りです。

### コロンブスの卵

東京大学名誉教授・国語問題協議会名誉会長 宇野精一氏

○歳児が漢字を記憶するということも、言われてみればコロンブスの卵のような話ですが、私がそのことを聞いてすぐ思ったのは、幼児が顔見知りするという事実です。人間の顔は千差万別であるのに、生後二ヶ月もたてば親の顔を記憶し、それ以外の人を識別するのはなぜでしょうか。

人間の顔が識別できれば、漢字の識別は当然可能なはずです。石井さんはそういう点から着想されたのかは知りませんが、実験で証明しておられます。

（『石井式漢字教育二十五周年の歩み』日本漢字教育振興協会編より）

### 丸暗記が可能な子ども時代こそチャンス

幼児開発協会元理事長 故・井深 大氏

石井勲先生は幼児教育に初めて漢字を導入した、漢字教育のバイオニアです。

私は昔から、幼児期は、パターンの時代だといひ続けてきました。私のいう。パターンは、意味のある事柄を形に表し、しかもその意味を追わず、単なる形として見る、というものです。

それにピッタリなのが漢字です。パターンとしての漢字は、子どもの場合、文句なしの丸暗記が可能なのです。丸暗記が可能な幼時期に、もっと徹底して丸暗記させておくべきだ、と私は考えます。(「石井式漢字教育二十周年記念誌」幼年国語教育会編より)

### 漢字こそ幼児には識別しやすい

お茶の永女子大学名誉教授 藤永 保氏

ワープロがこんなにも普及し、また外国人への日本語教育法が新しい問題となる現代においては「よみかき平行主義」という伝統も基本的に考え直す必要があるでしょう。好むと好まざるにかかわらず、こうした情勢は、漢字の「かき」よりは「よみ」のほうに大きく比重を移しつつあるのです。

そして、ひらがなは字画が簡単なために「い」「こ」「り」のように幼児にとって混同しやすい字形が生じやすいのに対して、漢字は複雑な字形をもつために、ある限度までは相互に識別しやすいのです。そのうえ、漢字は意味をもっているから記憶に残りやすいわけです。